

東京2020大会を見据えて

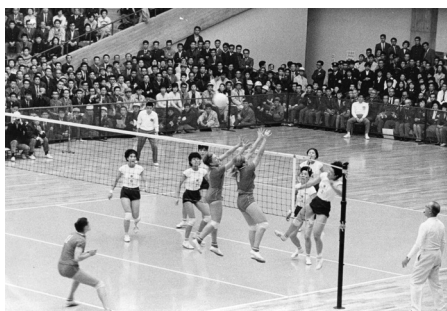
第9回 「金メダル」の向こうの「結婚」

— 東洋の魔女

田中 ひかる



世界バレーボール選手権大会で優勝。帰国後の歓迎会
(1962年)



東京オリンピック(1964年)

画像提供(上下とも):大阪府貝塚市

一九六四年の東京オリンピックで金メダルを獲得した日本女子バレーボールチームの選手は、ほぼ、大松博文監督率いる日紡貝塚(大日本紡績貝塚工場)チームで固められていた。国内で圧倒的に強かった一企業チームが、そのまま日本代表のチームとなったのである。東京オリンピックからさかのぼること三年。日紡貝塚チームはヨーロッパに遠征し、「回転レシーブ」や「木の葉落とし(変化球サーブ)」を駆使して各国の代表チームに二二連勝した。こ

れを評してソ連のメディアが使い始めた呼称が「東洋の魔女」である。翌一九六二年十月にモスクワで行われた世界バレーボール選手権大会でも、同チームは優勝をおさめた。当然ながら日本国内では、東京オリンピックでの金メダル獲得への期待が高まった。しかし予想に反し、当人たちはオリンピック出場を渋った。理由は「結婚問題」だった。多くの女性たちが二〇代前半で結婚していた当時、二九歳のキャプテン河西昌枝を筆頭に、

選手たちは「婚期」を逃してしまおうと焦っていた。監督の大松も、選手たちを「幸福な家庭をもたなければならぬ娘たち」ととらえ、一刻も早く「嫁がせたい」と考えていた。

しかし高まる期待に、とても引退できるような状況ではなかった。大松もそして選手たちも、金メダルを獲得する以外にも、引退の花道はないと腹をくくり、猛練習に明け暮れた。

そして臨んだ東京オリンピック。「東洋の魔女」は決勝でソ連を破り、金メダルを獲得した。しかし彼女たちのゴールはそこではなかった。翌年「魔女」たちは退社し、次々と結婚していった。時の首相佐藤栄作の仲人で自衛官との結婚を決めた河西の披露宴は、テレビ中継された。

世界の頂点に立った「魔女」たちの真の目標が「結婚」にあったというアンビバレントに、当時の一般的な結婚観が現れている。河西は幸せな家庭生活を送る一方で「ママさんバレー」の普及に努め、二〇一三年に八〇歳で他界した。

たなかひかる: コラムニスト。歴史社会学者。横浜国立大学大学院博士課程修了、博士号を取得。時代に翻弄される女性の研究を続ける。現在は1928年アムステルダムオリンピックに唯一の日本人女性として出場した人見絹枝について執筆中。著書に『生理用品の社会史 タブーから一大ビジネスへ』ほか。『「毒婦」和歌山カレー事件20年目の真実』を2018年7月に発刊。